

# 巻 頭 言

校長 浜 谷 望

大学生およそ5000人を対象にして昨年の11月に民間の研究所が行った大学生の学習と生活に関する調査<sup>[1]</sup>の結果が、最近、まとめられた。同様の調査がすでに2008年10月にも行われており<sup>[2]</sup>、今回の調査結果と比べてみると、この4年間の大学生の意識の変化や大学のカリキュラム改革の進展をかいま見ることができる。ここでは、上記の調査結果をもとに、大学で実験物理の講義や実験を教えている教員からの視点も加えて、高校と大学におけるこれからの考えてみたい。

調査に当たったベネッセ教育開発センター主任研究員の樋口健氏による明快な分析がすでに公表されている<sup>[3]</sup>。樋口氏は、現在の我が国の社会・産業界が大学にもっとも期待するのは、若者の主体性を育成し獲得させること、と指摘する。この問題意識に対して、大学がアクティブ・ラーニングを積極的に取り入れて応えようとしていることが調査結果に表れている。授業の方法や内容の経験頻度をたずねた質問では、「よくあった」＋「ある程度あった」の割合が「プレゼンテーションの機会を取り入れた授業」57.6%、「ディスカッションの機会を取り入れた授業」54.2%、「教室外で体験的な活動や実習を行う授業」39.1%などが前回調査から5ポイント以上増加し、「実験や調査の機会を取り入れた授業」49.6%も4.5ポイント増えている。これは大学で確かに実感できる。以前の実験の授業では、時々教員に質問しながら学生は各自実験を進め、各々レポートを作成していた。しかし、10年ほど前から発表と討論の時間を設け、さらに最近では、レポート作成前に結果や考察を数人の学生のグループ毎に教員と検討する機会をもつようにした。これはレポートの内容が年を追うごとに受け身でかつ希薄になってきたこと、すなわち主体的・能動的に考察するというサイエンスに本質的な思考法の欠如に危機感を感じたからであった。このことは、以下の調査結果に現れた「授業に対する学生の受動的姿勢」と表裏一体の関係にあるように思われる。

「大学の教育に対する選好」という質問では、「あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業が良い」が54.8%を数え、前回より5.9%増えている。「出席や平常点を重視して成績評価をする授業が良い」70.2%、「教員が知識・技術を教える講義形式の授業が多い方が良い」83.3%は前回調査と同じ程度だが、7～8割の学生が受動的なスタイルを好むことを示している。実際、受け持っている二年生の講義主体だが演習的な要素を含む授業でも学生の消極性が感じられる。

その場で解く問題を与え、しばらく後に黒板でその解答の発表を促す。中には進んで挙手する学生が1割程度いるものの、多くの場合、無反応である。しょうがないので指名す

る。驚くのは、できる、できない、の意思表示をせず、無言でいる学生もいることである。学力以前に、コミュニケーション力の問題かもしれない。また、以前、「出る杭は打たれる」状況を高校までに多く経験した学生と話をしたことがある。その結果、積極的に振舞うことを控えるようになった、と語っていた。大学入学までの様々な体験が大学生の考え方や行動に影響を与えているようである。

樋口氏が推測しているように、高校で講義形式の授業に慣れきっている、ということも受動的な態度の原因の一つかもしれない。予備校でも、人気のある先生は、きっと、丁寧でおもしろい授業をしてくれるのだろうと思う。テレビ番組もわかりやすく説明してくれる先生方の出演を好んでいるように見受けられる。また、「あまり系統立って学べなくても、自由に選択履修できるほうが良い」60.7%（4.2ポイント減）は、インターネットから大量の断片的な情報を受け身で得ることに慣れてしまっているからかと想像してしまうのは深読みだろうか。一転、大学では「論理的に自分で考える」学習スタイルを要求される。これは、未解決の問題を解こうとする、未知の現象を発見しようとする、現段階では複数のもっともらしい真実がありうる理論を扱う、といった「研究」を進めるうえで不可欠な思考法を身につけることを大学が期待しているからにほかならない。それまでほとんどが答えのある問題を勉強してきた高校生が戸惑うのも無理はない。では、どうすればよいのか。

大学で主体性をもって物事を考えることができるようにするための一つの策は、やはり、高校までの段階で自主的に考える方法・態度を身につけることができるような教育の方法を考えることだろう。そのためには、本校のような国立大学附属高校は、教育実践研究の先端に立って実験的な授業を試行し新たな道を開拓するのにうってつけの存在であろう。さらに、小中学校における教育も含めて社会全体で考えるべき問題に違いない。他方、高校での教育は大学入試と切り離すことができない。ここにきて、東大が推薦入試に踏み切り、京大がAO入試の採用を決定したことに、大学側の焦燥をみることができる。受験生がもつ学習能力と主体性を、将来性を見越していかに正しく評価し、育成できるかが大学の大きな課題である。

[1] ベネッセ教育開発センター、第2回大学生の学習・生活実態調査報告書 2013年4月

[2] ベネッセ教育開発センター、第1回大学生の学習・生活実態調査報告書 2009年3月

[3] <http://benesse.jp/berd/opinion/activity2/>